

クワインの行動主義的物理学と翻訳の不確定性テーゼ

一 翻訳の不確定性テーゼと行動主義的物理学

浜野 研 三

クワインの翻訳の不確定性のテーゼはその発表以来様々な論議を呼び、それについて数多くの論文が書かれた。ところが、いまなお、テーゼを支える議論のみならずテーゼの内容それ自体についてさえも、共通の理解が哲学界一般の常識として定着しているようにはみえない。しかしながら、このクワインのテーゼは言語表現の持つ固有の意味の存在を否定するのみならず、志向に関する科学の不可能性、志向的言語の科学の言語としての不適合性の主張等の極めて重大かつ大胆なテーゼを含意するものである故に、このような現状は遺憾なものと言わざるをえない。それに加えて、ともかくも三十年近い間哲学界に波紋を投げ掛けてきたテーゼがいかなるものであるかを、ここでいま一度顧みて正しい理解に持ちきたらすことは、意味のあることであると筆者は考える。そこで本論文ではまずなによりもクワインの翻訳の不確定性のテーゼがいかなる内容を有するものであるのかを明らかにすることを目標とする。そして、それによってえられる内在的理解を踏まえたいうで、筆者が行動主義的物理学と呼ぶことが妥当と考えている、そのテーゼを支えているクワイン哲学の基本的立場を考察し、テーゼの批判を試みることにする。批判は、クワインのテーゼの含意の重大さに比例して、物理学と還元主義の関係を中心とした物理学についての厳密かつ包括的な検討という非常に大きな課題と結びついており、筆者の準備不足もあり、行動主義批判の部分を除いて素描の域に留ま

らざるをえなかった。より包括的な批判は他日を期したい。

(一) クワインの翻訳の不確定性のテーゼ

『ことばと対象』においてクワインはまず次のように彼の翻訳の不確定性のテーゼの定式化をおこなっている。

「全て発話の傾向性の全体と両立可能でありながらしかもお互いの間では両立不可能な、或る言語を他の言語に翻訳する為の、複数個の手引を作ることができる。⁽¹⁾」

その例としてクワインは、共通の文化的言語的基盤を前提することが出来ない根本翻訳 (radical translation) の場合 (例えば今まで一切交流のなかった共同体に属する人々の言語調査を行う言語学者の場合) に焦点をあて、その人々が兎を見る度に、“gavagai” と呼ばれると、肯定を示す動作をしめすという事実に基づき、その表現 “gavagai” を「兎」 (“rabbit”)、⁽²⁾ 「兎性」 (“rabbithood”)、⁽³⁾ 「分離されていな、兎の諸部分」 (“undetached rabbit parts”) などと翻訳する三種類の異なった翻訳の手引を作る可能性がある事実をあげている。クワインのテーゼによると、これら三つの手引の各々は、調査されている人々の言語行動の傾向性の全体と矛盾することがないにもかかわらず、互いには両立しないという関係にある。

ここで注意されるべきことは、クワインにとって、翻訳などの言語学的探究において考慮されるべき経験的データは、ただ行動殊に言語的行動の傾向性のみであると言う事実である。従って、人々の言語行動の傾向性の全体と両立しうるそれらの手引は経験的に等値 (empirically equivalent) であるとクワインは述べている。ここにクワインの行動主義の立場が明瞭な形で現れている。その立場が翻訳の不確定性のテーゼ全体に対して持つ含意はのちにより詳しく検討される。また、同じ “gavagai” という表現を「兎」、「兎性」、「分離されていない兎の諸部分」と翻訳する翻訳の手引は論理的に両立可能ではないので、上の定式を「根本翻訳の際に、経験的に等値で且つ論理的に両立不可能な複

数個の翻訳の手引が存在しうる」と言い換えることができる。従って、クワインのテーゼは、経験的データは論理的に両立不可能である上記の三つの手引のどれが正しい翻訳の手引であるかを決定しえないと主張しているのである、ということが出来る。

上記の定式を一旦見ると、それは、物理理論をも含めて科学理論一般に妥当すると考えられている所謂経験的データによる理論の不完全決定性 (underdetermination of theory by empirical data) のテーゼの特殊な例であるかにみえる。⁽⁴⁾しかしこのような解釈は、クワインの不確定性のテーゼの誤解を導くと同時に、様々な論争を巻き起こし我々に深刻な哲学的反省を強いる可能性を持つクワインの哲学的立場の根本的な特徴を見失う結果をもたらすことになる。実際、クワインは『ことばと対象』において既に不確定性のテーゼと不完全決定性のテーゼとの間には本質的な相違が存している事実を次のような仕方ですべて示唆している。

「要点は、我々はその分析仮説が正しいかどうか確信出来ない、ということではなく、……それについて「分析仮説の」正誤が云々されるべき客観的事態 (Objective matter) さえ存在しない、ということなのである。」⁽⁵⁾

このクワインの主張を理解する為にはまず分析仮説とはなにかが明らかにされなければならない。言語学者は翻訳を行う際、無制限な数の文を取り扱うのであるから文全体のみを分析の単位とすることは出来ず、文を繰り返して現れる適当に短い部分に分節化し、それらの部分各々と自らの言語の部分との間の対応づけをおこなわざるをえない。その対応づけについての仮説が分析仮説なのである。クワインが強調するように、分析仮説は翻訳の手引の不可欠の要素としてその中核をなすものであり、不確定性のテーゼは唯一正しい分析仮説の存在にかんするテーゼであると言える。⁽⁶⁾

上記の引用箇所によると、不確定性のテーゼにおいては、単に我々がどの分析仮説が正しいかを知ることが出来ないというのみならず、分析仮説がそれとの比較対照によってその真偽が確定されるべき客観的事態それ自身が存在し

ない、という主張がなされている。従って、不完全決定性のテーゼは認識論的であるのたいして、不確定性のテーゼは存在論的である、と言うことができる。つまり、前者が我々の認識能力に関するテーゼであるのに、後者は我々の認識能力についてではなく、我々の認識の対象となりうる實在との連関についてのテーゼなのである。不確定性のテーゼは不完全決定性のテーゼとはレベルを異にし、それよりもより一層強い主張なのである。

上記のような『ことばと対象』にみられる説明のみによつては、存在論的なテーゼとしての不確定性のテーゼがいかなる実質的な内容をもつのが明らかではない。それ故、『言葉と批判』におけるチョムスキーによる不確定性のテーゼ批判にたいするクワインの答弁を、『ことばと対象』における不十分な説明を補うものとして顧みることにする。この論争におけるチョムスキーの批判は、一言で言うと、不完全決定性のテーゼは与えられた証拠の範囲を越えて推理する仮説演繹法の特性からの帰結であり誰もが当然なものとして受け入れるものであり、不確定性のテーゼもまた不完全決定性のテーゼの一種として何らの新たな洞察を含むものではない、というものである。チョムスキーは、クワインが科学のモデルと考えている物理学でさえ翻訳と同様に不完全決定性から自由ではありえない、少なくとも、クワインは不完全決定性に対する不確定性という形で物理学の場合と翻訳の場合とを区別しなければならぬ明確な理由を提出してはいない、と主張する。このチョムスキーの批判に対してクワインは、翻訳と物理学、従って不完全決定性と不確定性の違いを次の様に説明している。

クワインは、同一の経験的データに合致する複数の両立不可能な理論ないしは翻訳の手引の存在という点での物理学と翻訳の間の類似性を認めるが、最終的には両者の間に実在的な事実との関係に関する明確な相違が存在していることを指摘する。クワインによると、その相違は「物理学における理論が究極のパラメーターである」⁽⁸⁾という事実に基づいている。物理理論こそが實在の構造を記述する際の究極のただてを提供するものであり、その事実が物理学と翻訳の間の決定的な相違を産み出すのである、とクワインは主張するのである。その探究の高度さ或いは堅固さにお

いて物理学を超えると考えうるような所謂第一哲学などは存在しない。物理学理論が実在の構造についての最も權威ある判定を下す役割を担うものといふことができる。従つて、物理学理論の持つ不完全決定性のテーゼと言へども、科学的探究をなす人間それ自身が自然的世界の一構成要素である故に、「自然及び自然的対象としての我々自身についての我々の理論の不可分な部分をなすものである」と言わなければならない。ここに後により詳しく説明さるべきクワインの自然主義の立場が明確に表明されている。

しかし、翻訳における不確定性はそれとは性質を異にしている。それは物理学理論にみられる不完全決定性の特殊な場合ではない。「それは〔不完全決定性〕にパラレルではあるのみならず付加的でもある。(It is parallel but additional.)」と主張する⁽¹⁰⁾。それは次のことを意味していると解釈される。我々は実在の構造について最も權威ある判定を下すものである物理学理論が原理的に不完全決定であることを知っているが、翻訳の場合には、たとえ唯一正しいともくされる物理学理論が確定されたと仮定した場合においてさえなお、唯一正しいとされる翻訳の手引を確定することが出来ないと考えざるをえない。この意味で翻訳の不確定性は付加的なのである。ところで、唯一正しいとされる物理学理論によつて実在の構造が一義的に確定されたのちになつても唯一正しい翻訳の手引が確定出来ないとなれば、それは、競合する翻訳の手引の間の相違が実在世界の構造との有意味な連関を持たないという事実を、意味していると言わざるをえない。即ち、実在世界の内にそれら翻訳の手引がそれとの照合によつて真偽が確定さるべき客観的な事象ないしは事実が存在しないと言わざるをえないのである。このように物理学理論の不完全決定性と翻訳の不確定性の間には、対応する客観的事象の存在の有無に基づく、大きな相違が存在するのである。

クワインはそれを次のように述べている。

「この〔唯一正しい理論として現在の物理学理論の眞理性が一義的に確定したとする〕實在論的な観点から、既知のもの未知のもの、観察可能なもの観察不可能なもの、過去のもの未来のもの等、自然に関する諸々の眞理の

全体を考えてみよう。翻訳の不確定性の要点はそれがこの真理の全体、即ち自然に関する真理の全体にもかかわらず存在し続ける、ということである。このことが、私が、翻訳の不確定性が当てはまるところでは正しい選択にかんする実質を伴う問いは存在しない、自然についての理論の認知された不完全決定性の内部でさえ (even to within the acknowledged underdetermination of a theory of nature) 実在的な事実 (fact of the matter) が存在しないと述べることによって、言わんとしたことである⁽¹¹⁾。

上に述べた主張がクワインの翻訳の不確定性のテーゼの核をなすものである。クワインは七〇年代以降この事実をいよいよ明らかにし、自らの説に対する誤解を防ぐよう努めている。例えば、一九七七年に出版された論文「実在的な事実」⁽¹²⁾においてクワインは翻訳の不確定性のテーゼに触れつつ、「私の「ここでの」目的は、単に、実在的な事実が存在しないというときに私は物理主義者として語っているのであること、を明らかにすることである。両方の手引が時空域によるまさに同一の基本的な物理的状态の実現 (the fulfillment of just the same elementary physical states by spacetime regions) と両立可能であると、私は言いたいのである。」と述べている。更に一九八一年に出版された「理論ともの」所収の論文「ものとそれらの理論における位置」においては次のように述べている。全ての重要な要点が極めて明確に述べられているので、長くなるのを厭わずに、次に引用することにする。

「実在的な事実なる概念によって意図されているものは、超越論的なものでも認識論的なものでもなく、また証拠の問題にかかわるものでもない。それは存在論的なものであり、実在の問題にかかわるものである。そしてその概念は自然主義的に世界についての我々の科学的理論の範囲内で理解されるべきなのである。例えば、理解を容易にする為に、我々がいまなお基本的な物理粒子の物理学を受け入れており、一ダースほどの基本的な状態やそれらの粒子がおりなす関係を認めている、と仮定しよう。その時、私が、例えば二つの競合する翻訳の手引に関して実在的な事実が存在しないと言う時、私は両方の手引が素粒子の状態と関係についての同一の分布の全

ての場合と両立可能である (compatible with all the same distributions of states and relations over elementary particle)、『と言わんとしているのである。一言でいうと、それらの手引は物理的に同値なのである。言うまでもなく、微小物理的な状態と関係についての適切な分布を我々がえりわけうるなどということは考えていない。私は「存在論の観点から」物理的条件について語っているのであって「認識論の観点から」経験的な規準について語っているのではない。』⁽¹⁴⁾

ここで注意さるべきことは、この引用にみられるように、クワインが物理理論については實在的事実が存在すると
言う時には、物理学が實在理解の究極のパラメーターであるとする彼の物理主義のみならず、クワイン哲学の今一つの基本的立場をなす自然主義が重要な前提となっていることである。対立する自然にかんする理論(クワインの哲学においてはそれはまさに物理理論である)から独立かつ中立の立場に立つ第一哲学、いわば認識論上のアルキメデスの点などは存在しない。「宇宙論的な亡命 (cosmic exile)⁽¹⁵⁾」は不可能なのである。従つて我々が何らかの形で實在世界について有意味に語ろうとするならば、いづれか一つの理論を採用しその理論内部で語らねばならない。そして實在世界について少なくともも現在迄のところ最も成功しており従つて最も信頼しうる自然科学的探究の方法と成果、殊に物理学の方法と理論を、クワインは自らの哲学の基盤に据える。このような自然主義者でありかつ物理主義者であるクワインの哲学において、我々が事実や真理について有意味に語りうるのは、ただ究極のパラメーターとして我々が採用した或る一つの物理理論の内部でのみなのである。採用可能な物理理論の中からある一つの理論が我々によって採用され、究極のパラメーターが決定されなければ、真理や實在的事実についてのいかなる有意義な主張や議論もなしえないのである。このような仕方では、第一哲学の可能性を否定するクワインの自然主義は物理理論に言わば存在論上の特権的地位を与えることによって、彼の不確定性のテーゼを支えている。「それ〔實在的事実なる概念〕は存在論的なものであり、實在の問題にかかわるものである。そしてその概念は自然主義的に世界についての我々の科学

的理論の範囲内で理解されるべきなのである。」このように、クワインの翻訳の不確定性のテーゼの核となる物理理論の不完全決定性と翻訳の不確定性の区別は、実在的事実の有無というまさに存在論上の相違に基づいているということが出来る。

以上に述べたことから明らかなように、クワインの翻訳の不確定性のテーゼを理解するためには、既上で説明した自然主義および、それと緊密に結びついた彼の物理主義の理解が不可欠である。今一度確認しておく、不確定性のテーゼを主張する時、クワインは、その可能性が否定された第一哲学に代わるものとして、物理学の理論こそが実在世界の構造についての我々人間にとっての最終的な判断規準をあたえるものと考え、物理主義者として、それを主張しているのである。物理理論によって実在世界の構造が明らかにされたと仮定した場合でさえ、不確定性は残る、言い換えれば、不確定性は実在世界の構造に基礎を持たないものでしかないのである。従って物理学とは違って不完全決定性のみならず不確定性をもたざるをえない翻訳の作業は、科学の一部とはいふことができないのである。これが翻訳の不確定性のテーゼの根本的な主張なのである。

以上述べた如く、クワインの翻訳の不確定性のテーゼの根底には自然主義に裏打ちされたクワインの言わばハードでタフな物理主義が存在しているのである故、不確定性のテーゼを理解しそれに対して明確な態度をとる為にはクワインの物理主義それ自身が正しく理解されねばならない。ここではクワインがまさに彼の「実在的事実」の概念に実質的な内容を与えようと試みた論文「実在的事実」に依りつつ彼の物理主義の内容を検討し不確定性のテーゼのより明確な理解を試みることにする。

(二) クワインの物理主義

クワインは「実在的な事実」と名づけられた論文において彼の物理主義の定式化を試みている。そこではまず「物

体の位置または状態に関する相違なしには世界の内に如何なる相違も存在しない⁽¹⁶⁾、そしてよりくわしい形で「時空域による物理的状态に関する述語の実現に関する相違なしには、実在的な事実に関する如何なる相違も存在しない (There is no difference in matters of fact without a difference in the fulfillment of the physical-state predicates by space-time regions)」⁽¹⁷⁾という定式があたえられている。上に説明したように、自然主義者クワインにとって、実在的な事実なる概念は自然主義的に世界に関する我々の科学の理論の内部で理解されるべきものである。それに加えて、物理主義者クワインは、基本的な物理状態が実在的な事実の究極のパラメーターであると主張する。非物理的な相違、例えば心的な状態に関する相違があるところには、常に物理的な相違(時空域による物理状態述語の実現に関する相違をそう呼ぶことにする)が存在する。換言すれば、もし心的な状態に関して実在的な事実を基礎を持つ相違があれば、物理的な相違が存在するし、また、物理的な相違がなければ、いかなる心的状態に関する相違も存在しない。このような意味で物理学は「基礎的な自然科学」(the basic natural science)⁽¹⁸⁾と呼ばれるのである。ただし、上述の定式は全ての他の領域についての探究が物理学に還元されうると主張しているのではない。クワインは彼の物理主義によって、全ての心的現象が物理学の言葉で記述出来るとは主張しないのみならず、心的現象と物理現象の間に、そのような物理主義的還元を許すような法則的連関の存在さえ認めようとはしない。クワインの物理主義は還元主義的なものではないのである。しかし、「物理的变化なしには如何なる変化も存在しえない」という原則に立つクワインの物理主義は、心的現象を存在論上の余計者として消去することを導く。それ故、クワインの物理主義は非還元主義的であるが消去的 (eliminative) であるといふことができる。但し、クワインは集合等の数学的実在の存在を認めている。クワイン自身が明言しているように、彼の物理主義的存在論は非物理的存在者を全く排除している訳ではない。従って、クワインは、存在論としては物理的なもののみならず数学的なものの存在をも認める、非還元主義的かつ消去的な物理主義者であるといふことができる。

ここで強調されるべき事は、クワインが自らの物理主義の非還元主義的性格に基づき物理主義的還元が不可能な現象や性質から実在性を剝奪している事実である。クワインの非還元主義的物理主義は、還元不可能な非物理的現象や性質に独自の形で実在性を付与する方向に向かわずに、それとは全く逆にそれら還元不可能な非物理的現象や性質を、対応する実在的事実を持たない、科学理論の観点からは空虚なものとして科学的記述や説明から排除する立場を導くに到る。非還元主義的であるといってもあくまでタフな物理主義の立場を保持しようとするのである。

実在の眞の構造を記述することを目的とする、科学の名に値する探究は実在的な事実に基づくものでなければならぬ。ところで、実在的な事実とは実在世界の構造に基礎を持つ事実、言い換えれば、事実の名に値するような実在の特徴である。実在の構造が関わる場合にのみ実在的な事実が存在する。そして科学的な探究における我々の論説は最終的には実在の特徴についてでなければならぬ。即ち、眞に科学の名に値する探究においては科学理論を構成する文がそれに関して正しかったり或いは間違っていたりする実在的な事実が存在しなければならぬのである。もし、それらの文に対応する実在的な事実が存在しなければ、それらの文はまさになら実在に関わるものではなく、正しい意味において科学理論の部分をなすものと見做しえないということが出来る。それ故、実在的な事実の存在は一つの文が科学理論の部分をなす為の絶対的な必要条件をなしていると言うことができる。そして、上に述べたようにクワインにとって、集合等の数学的存在を除いて、実在的な事実をなすものは物理的な状態であり、物理学の言葉で記述説明さるべきものである。従って、クワインの物理主義の主張は、結局、数学的実在の場合を除いて、実在的な事実の相連に対応する、その名に値するような実在の特徴は、全て物理学の言葉を用いて記述説明することが可能であるという主張に帰着する、と解釈することが出来る。クワインが、両立しない翻訳の手引きの眞偽を一義的に確定する実在的事実が存在しないことをもって、換言すれば、意味論的な性質を物理主義的に還元することが不可能であることをもって、物理理論の不完全決定性と翻訳の不確定性の決定的かつ重要な相違をなすものとして強く主張する時、

即ち、クワインが物理理論の不完全決定性と翻訳の不確定性の区別は認識論的ではなく存在論的なものであり、各々の理論と実在世界の構造との連関の在り方に基づいているものであると主張する時、その主張の背後には上に述べたような彼の非還元主義的で消去的な物理主義が存在しているのである。筆者は以上のようにクワインの物理主義を解釈する。

以上の説明によってクワインの物理主義が彼の不確定性のテーゼで果たす役割が明らかになったが、なお不確定性のテーゼの全容が明らかになつたとは言えない。何故なら、何故物理主義者クワインが行動に関するデータからなる証拠による不完全決定性から、実在的事実の欠如、従つて不確定性の主張へと、いわば一足飛びに到りえたのか、その動きをなす際にクワインが有するべき根拠が明らかではないからである。それを理解する為にはクワインの行動主義を支える根拠および言語の実質内容にかんする行動主義の含意が明らかにされねばならない。クワインの物理主義は彼の行動主義と密接に結びついている。そこに筆者が行動的物理主義なる表現によつてクワインの不確定性のテーゼを支える根本的立場を特徴付ける所以がある。そのようなクワインの物理主義と行動主義のあいだの関係を理解しない限り、彼の不確定性のテーゼの全き理解は期待できない。

(三) クワインの行動主義

上に述べたようにクワインの不確定性のテーゼの主要な論拠の一つをなしているのは彼の行動主義であり、実際の正確な理解なしには不確定性のテーゼの正しい理解は成立しえない。ここではその行動主義の内容とそれがテーゼで果たす役割の説明を試みることによつて不確定性のテーゼの説明を終えることにする。まずクワイン自身による説明をみることにする。クワインは「ところと言語的傾向性」において人間の行動に関する説明についてメンタリストティックなレベル、行動主義的レベルそして生理学的レベルの三つのレベルを区別している。それによると、行動主義

的レベルの説明は、説明とは似て非なるメンタリストイックな説明をこえて最終的な説明である生理学的説明にいたるまでの間の、一時的中間的な説明ということになる。⁽¹⁹⁾しかし、言語理論に関してクワインはより大胆に行動主義を擁護する。クワインは言う、

「一つの哲学として行動主義を受け入れていない人々もある種の科学的な探究においては行動主義的な方法に固執するべく義務づけられている。そして言語理論はそのような探究の一つである。言語に関する科学の探究者は、そのかぎりにおいて、職務上の行動主義者である。言語の内的なメカニズムに関する最終的に最良な理論がどのようなものとなろうと、その理論は、行動に基づくという言語学習のもつ性格——即ち「学習によって獲得される言語使用能力の現実態としての」言語行動の、言語行動に関する観察にたいする依存という性格——に従わざるをえない。一つの言語は社会的な模倣 (imitation) とフィードバックを通して習得される。そしてこれらの「社会的」制御は行動の内に見出されない個人のイメージや連合のもつ個人に特有な性質は無視する。⁽²⁰⁾」

このような考えはクワインの「言語とは我々全てが、公共的に判別可能な状況の下での他の人々の公然の行動という唯一の証拠に基づいて、習得する社会的な技術である」⁽²¹⁾という考えに基づいている。クワインによれば、我々が言語を習得するのは、公共的に観察可能な状況の下での公共的に観察可能な行動によってであり、そのような意味での行動に基づく性格が社会的技術としての言語の実質的な内容を形作っている。従って行動によって意味を与えられない言語上の区別は端的に無意味な区別として捨て去られるべきである。「二つの言語表現が意味の点で似ているか否かは、答えが既知あるいは未知の、人々の発話行動の傾向性によって原則的に解決される場合を除いて、未知あるいは既知の、いかなる確定した答えをも持たない。」⁽²²⁾このような言語理論殊に意味論におけるクワインの徹底した行動主義の背後には、言語の習得の特徴から言語そのものの主要な性格を導き出す、その妥当性が自明ではない推論が存在している。その推論は批判されるべきものであると筆者は考える。その推論とは、上の引用からも窺われるように、

言語の習得は行動に関するデータにのみもつづいて、そのような行動に関するデータにのみ基づきつつ習得しうるのであるから、言語の実質をなすものは行動に関するデータによって捉えうるもののみからなっている、というものである。この推論の妥当性の検討は次章に譲り、次にクワインの言語に関する科学における徹底した行動主義が彼の不確定性のテーゼで果たす役割を説明する。

既に何度も繰り返したように、不確定性のテーゼは、言語行動の傾向性の全体からなるデータとは両立するが互いには両立しえない翻訳の手引きの存在の可能性から、翻訳理論が実在的事実を持たないとの結論に到るのである。そして、まさにこの推論の過程の内においてこそ、クワインの行動主義が重要な働きをなしているのである。前節で述べたように、クワインの行動主義によると、我々の言語習得の在り方から明らかのように、言語の実質的内容を形作っているものは行動及び行動への傾向性に基づいている。行動レベルにおける相違は明らかに物理レベルでの相違を保証している。換言すれば、行動レベルにおける相違は、それを指標とする言語表現の意味の相違に対して、それに対応する実在的事実の存在を保証するのである。ここにクワインの行動主義と物理主義の接点がある。行動レベルでの区別は最終的に物理的レベルの区別によって基礎づけられている。また基礎づけられねばならないという仕方でも、クワイン哲学全体における物理主義の存在論上・方法論上の優位が示されている。クワインの行動主義は、物理レベルでの区別の指標としての行動の補助的道具的役割の理解に基づいているのである。

しかし、ここで注目さるべきなのは、この行動の補助的道具的役割を強調する行動主義が一つの言わば自立的な働きをなし、極めて重要な影響をクワインの哲学全体従ってまた不確定性テーゼに与えていることである。即ち、クワインの行動主義の立場からすれば、如何に物理的レベルで相違があるうとも、それが行動のレベルでの相違と対応していなければ、それら物理的レベルでの相違は言語表現の意味の相違に対応しそれを基礎づけるものとは見做されないのである。換言すれば、物理的レベルでの相違は、意味の相違の指標となる行動レベルでの相違を、様々な形で物

理的に実現しているものと見做されうるかぎりにおいてのみ、言語表現の意味の相違を基礎づけて見做されるのである。クワインがしばしば用いる、様々に異なった内部の微小構造をもつがすべて象としての同一の外見をもつ複数の植え込みの比喩が明らかにしようとしているのは、このような事態に關してである。同一の事態を異なった比喩を用いて記述すれば次のようになる。行動による区別の網の目は微小物理的レベルでの区別の網の目と比べて極めて粗いにもかかわらず、言語に關する科学においては前者が基本的に優先される。その根拠となるものが、上に述べた、言語の習得の在り方から導き出される言語の実質についての行動主義的な理解なのである。

以上の説明によって、翻訳の不確定性のテーゼの内容と構造及び何故筆者がテーゼの核をなす立場を行動主義的物理解主義と呼ぶかが明らかにされた。それを次にまとめて第一章を終わることにする。クワインの自然主義と物理主義によると、真理や実在的事実従って存在について有意味に語りうるのは、ただその時点において最良なものとして我々によって採用された物理理論の内部においてのみである。それ故、物理理論はその不完全決定性にもかかわらず実在的事実を有している。他方クワインの行動主義によると、言語表現の意味の区別は、物理的レベルでの区別従って実在的事実を保証する行動のレベルでの区別に基づけられるもののみ、限られている。それ故、行動のレベルでの区別を超えた、対立する翻訳の手引の間の区別は単に不完全決定的であるのみならず、それに対応する実在的事実を持たず、科学的探究の対象たりえないのである。

二 クワインの行動主義的物理解主義の批判

この章ではまず、第一章で説明した行動主義的物理解主義を行動主義による物理主義の歪曲として批判する観点から、不確定性のテーゼを批判する。次に、クワインの哲学の目的を考慮に入れつつ彼の物理主義と不確定性のテーゼの關係を検討し、筆者のクワインの不確定性テーゼ批判の内容をより明らかなものとした。

(一) 行動主義による歪曲

第一章の行動主義の節で説明したように、クワインは、人々が公共的に観察可能な行動からなるデータにのみ基づきつつ言語を習得するという事実から、言語の実質的内容は行動によって基礎づけられうるもののみからなる、という結論を導いている。そしてその結論が不確定性のテーゼの重要な前提をなしている。

クワインはこのような重大な結論を導き出す推論を自明であるかのごとくに、数行で述べるのみであって、詳しい議論を展開していない。しかしこのような推論には次のような反論がありうる。クワインは人々はただ行動に関するデータにのみ基づいて言語を習得しているとの前提のもとに上記の推論を行っているが、その前提は自明のものではない。むしろ論点先取であると言わねばならない。何故なら、言語習得の際に我々が手掛かりにするデータが行動に関わるデータにのみ基づいていたとしても、そのことから直ちに言語習得の際に我々に与えられているものがただ行動に関わるデータのみであるということは導かれない。というのも言語学者が根本翻訳の際に主張するように「より顕著な仕方では区別された統一性は、「それに比例して」、より単純な名辞をもつより大きな傾向を有している」、また「対照をなす背景の下、一つの統一体として動きをなす持続的かつ相対的に同質な対象は、往々にして短い表現の指示対象である」⁽²³⁾ということができるし、そのみならずそれを支えるメカニズムが神経生理学的に解明されることも可能である。ところがクワインはうえに引用した言語学者がなすであろう主張を「言語行動の実質的な法則」と誤解されてはならない、それらは言語学者がその言語に押しつけたものである、とそれらの理論的な意義を否定する⁽²⁴⁾。しかしクワインはそのような自らの主張を説得的なものとするいかなる議論をも提出していない。クワイン自身理論選択の際に理論の単純さを重要な判定規準とする傾向について、それは単なるきまぐれな趣味ではなく、「単純さへの衝動の神経学的なメカニズムは知られてはいないが、疑いもなく根本的であり、その生存価値は圧倒的である」⁽²⁵⁾と述べている。とするならば同様な理由の下にうえの言語学者の主張を支持する神経生理学的なメカニズムが存在したと

してもなんら不思議ではない。もしこのことが真であるとするならば、*'undetached rabbit parts'*ではなくまさに *'rabbit'*、これを正しい翻訳とする実在的事実が存在することになる。そしてまた言語習得の際にその神経生理的なメカニズムが働いていると考えることができる。そのことは言語習得の手掛かりにするデータが行動に関するもののみであっても、それを処理するメカニズムの内に確定可能な部分が存在することを意味している。そしてそれは同時に、その確定可能な部分が言語の実質の確定可能な部分をなしていると言いうることをも意味している。

このようにたとえ言語習得の際に用いられるデータが行動に関わるものに限られるとしても、そのことが直ちに習得を可能とするミクロなレベルのメカニズムが習得の在り方に実質的な制約を課さない、即ち言語習得の基盤をなすものが単に行動に関わるデータのみである、ということの意味しない。従って、データが行動に関わるもののみであったとしても、そのことから言語の実質をなすものが行動に関するデータによって裏付けられるもののみであるという結論を導くことはできない。このような形でのクワインの行動主義は彼の基本的な立場である物理主義自体とは矛盾しない。いやそれどころか上に述べた結論は徹底した物理主義の立場として捉えることができる。クワインは言語に関する探究において行動主義の立場を必要以上に受け入れてしまつて、その結果自らの基本的立場である物理主義にたいして過剰な制約を加えてしまつたようにおもわれる。より正確にいうと、クワインは行動の傾向性は結局神経生理的なレベルのメカニズムに基づいておりそれによって説明されるべきものと主張することによって物理主義的立場を強調しながら、実際には言語習得の在り方から行動のレベルにおける区別が唯一つの言語の実質をなすものとして行動主義による歪みを自らの物理主義に与えたのである。そのクワインの行動主義を支える基本的なイメージは、解剖学的な構造のレベルにおいては共通のパターンを見出すことが不可能な程に様々に異なっているにもかかわらず、目にみえる外形の部分ではすべて一様に象の形をしている植え込みのイメージである。クワインは、目にみえる・公共的等々と行動によるデータの公共的な観察可能性を強調しているが、その際に言語習得者に意識され自覚されうる

ものにも注意を集中し、その結果意識されたり自覚されたりはしないが人々の言語習得の過程で重要な働きをなし、そして言語の実質的内容を形作っていると見做されるものの存在を見失ったようにおもわれる。この事実をいまいちど確認するためにセラーズに対するクワインの答弁の一節を引用しておく。

「セラーズは意味の類似は神経装置の類似、プログラミングの類似に依存しているとの示唆を行っている。私にはこの説が信じがたい。何故なら、我々は言葉を根本的に異なった順序で学習するからである。学習や教授は確かに神経に関わる事柄である。しかしそれらはアウトプットからのフィードバックによって導かれている。話者の間でのアウトプットの様性が重要な事柄なのである。これが、我々は小枝の分かれの点について内部の構造は大いに異なるにもかかわらず、植えこみ全体は同一の形に刈り取ると言う植え込みのアナロジーの要点である」⁽²⁷⁾

しかしながら上に述べたように、言語の場合に個々人の言語習得のを支える多様なミクロな神経生理的なレベルの構造やメカニズムの間にある種の類似のパターンを見出す可能性を否定することはできない。マイケル・フリードマンは、クワインが上記の推論を安易に受け入れる事実の背後にクワインの哲学の内に存在している実証主義の残滓をみて⁽²⁸⁾。上に述べた批判は、クワインは、何ら説得力のある理由を提出することなく、データを越えて理論的存在者を措定することによって説明を行う科学の基本的手続きの妥当性を言語学的探究については認めない、というチョムスキーの批判と軌を一にするものである。ともかくクワインは、行動のレベルでのデータの言わば理論にたいする規制力を絶対化せず神経生理レベルの知識の理論にたいする貢献を認めて、みずからの物理主義により忠実な立場をとるか、あるいは、自らの行動主義的な言語理解を保持するためにより説得的な議論を提供するか、のいずれかの選択肢を選ばざるをえないのである。

(二) クワインの物理主義と自然主義化された認識論

上に述べたように、クワインにとって、物理的状态の変化なしにはいかなる変化もないという意味で物理的状态が基本的な状態であり、その探究を行う物理学が基礎的な自然科学である。そしてクワインが翻訳の不確定性、即ち、翻訳の手引の選択に関わる実質的事実の欠如を主張するのは物理主義者としてである。前節でのクワインの行動主義に対する批判は、物理主義を受け入れた場合においても彼の不確定性のテーゼは受け入れたいことを論じたのであるが、この節においては、前節での批判をより詳しく展開し、その後クワインの自然主義化された認識論の構想と不確定性のテーゼとの矛盾・緊張の存在を指摘し、不確定性のテーゼ及び物理主義の不安定な在り方を明らかにする。そこで物理主義それ自身の妥当性についても疑問を呈することにする。

クワインは「物理的状态の変化なしにはいかなる変化もない」より詳しくは「時空領域による物理状態述語の充足に関する変化なしには実在的事実に関するいかなる変化もない」との主張が彼の物理主義の根本の主張であるとしているが、この主張を受け入れることができるであろうか。まず言いうることは、物理的な変化なしにはいかなる変化もないということは大多数の人によって受け入れられるであろう、ということである。実際、独自の实体としてのところや超心理的な現象の存在をうけいれることなしには、物理的な変化が一切ないところになんらかの形での実質的な変化が生じうると考えることはできない。なんらかの実質的な変化があるところには物理的な変化が生じているのである。このことからクワインは実在の構造の記述説明は最終的には物理学の言葉でなされるべきであるとの結論に至る。

次にクワインは彼の行動主義に基づいて、翻訳理論に対応する実在的事実はないと主張する。それは、結局一(一)で述べたように、意味論的な事実や性質を物理主義的に還元出来ないという主張に帰着する。その主張の根拠として挙げられているのが、言語活動を支えている下位の物理レベルのメカニズムの圧倒的な多様性と異質性(heterogeneity)

である。圧倒的な多様性と異質性の故に、言語活動の意味論的側面と下位の物理的メカニズムの間には十全な意味で科学的説明を構成するのに十分なパターンを見出すことが出来ない、とクワインは主張するのである。しかし、このようなクワインの主張に対しては、少なくとも次の二つ反論が可能である。その一つは、前節で述べたように、行動主義的な偏向を出来るかぎり排除したうえで、物理主義の基本的立場に立って事柄を考察してみれば、一見收拾がつかないかみえる多様性と異質性の内に或る物理的に記述可能なパターンを見出す可能性が全く否定されているのではないことが理解される、ということの確認に基づいている。とにかく、クワインはパターンの不在の可能性を示唆したのみであって、その示唆に説得力を持たせるための議論を提出してはいないのである。それに対して、パターンの存在を主張することは、言語活動の意味論的側面への物理的メカニズムの規定力を認めることを意味しており、物理主義と矛盾するどころか、その立場をより強めた立場であるといえることができる。

今一つの反論は、たとえクワインの主張を認めて、言語行動の意味論的側面に対応する物理レベルでの共通のパターンが存在しないとしても、そのことは個々の言語活動の意味論的側面を個々の具体的な事例において支えている物理的メカニズムの存在を否定するものではない、という事実によって依っている。言わば、意味論的事実或いは性質と物理的メカニズムの間のタイプ・アイデンティティが否定されたとしても、両者のあいだのトークン・アイデンティティの存在可能性は残る、という事実が反論の要である。そしてトークン・アイデンティティが存在するならば、言語活動の意味論的側面に対応する実在的事実が存在することになる。意味論的事実或いは性質は、その具体的な実現の例のそれぞれにおいて、ユニークな物理的メカニズムと同定されるのである。従って、翻訳の手引・分析仮説は実在的事実を持つことになる。

このような反論に対して、物理主義者クワインは全ての言語行動の背後にそれを支えている物理的メカニズムの存在を認めている筈であり、その意味でクワインはトークン・アイデンティティを認めているのではないか、従ってこ

の第二の反論は反論になりえないのではないか、という疑問が呈せられるかもしれない。しかしながら、筆者は、クワインが、一(二)で述べたように心身問題において消去的唯物論者であるのと類比的に、意味の理論にかんしても消去的態度をとっていると解釈する。よりくわしくいうと、心身に関する還元主義従って両者のタイプ・アイデンティティが否定された場合、消去的唯物論のみならず両者のトークン・アイデンティティを主張する選択肢も残されているのにもかかわらず、クワインは後者の立場を検討することなく前者の立場を選んだのであるが、まさにそれと類比的なことが意味の理論においてもなされたのではないかと筆者は考えるのである。実際、このように考えないかぎり、クワインが、意味に関する物理主義的還元の可能性から直ちに言語活動の意味論的側面に対して実在性を否定する事実についての納得のいく理解が得られないのではないかと筆者には思われるのである。

一、二の反論のうちどちらをより事態にそくしたものとするかについては、タイプ・アイデンティティとトークン・アイデンティティの関係、スーパーヴェニエンス (supervenience)、物理的規定 (physical determination) などの概念の詳しい検討が必要であり、本論文では、後にしめすような筆者の立場の素描に留めざるをえない。しかし、ともかく一、二の反論のいずれが成立しても翻訳の理論が実在的事実を持つことになり、不確定性のテーゼは否定されることになるのである。

次に、一、二の反論にもかかわらず不確定性のテーゼが保持された場合の問題点を指摘する。一(二)で述べたように、クワインによると、数学的命題を除いて世界についての記述説明を行う文がまさにその対象としている事実は物理的事実である。そのような物理的事実がそれらの文に、実在の構造の描写を目的とする科学理論の構成メンバーとしての地位を付与するのである。逆に、対応する物理的事実を持たない文は科学理論の構成メンバーたりえないのである。実在的な事実、即ち物理学の言葉で記述しうる事実こそが或る文が科学理論の構成メンバーたりうるか否かの規準を提供する。従って、科学の観点からするならば、数学的事実を除いて、考察の対象となるべき事実はすべて物

理的なものでなければならぬことになる。クワインのこの考えを、クワインにとって数学的な事実を除いて科学的
事実とは物理的事実である、と表現することにする。

しかし、実際に、科学的事実とは物理的事実であるということができるのであるか。ここで、クワインにとって
第一哲学などは存在せず従ってクワインの認識論もまた科学の科学 (science of science) たる自然主義化された認識
論であることがおもいだされねばならない。その自らの認識論のなかでクワインは規範やルールについて語り、最近
になってはより明白な形で、規範的な認識論 (normative epistemology) の存在を認めている。「認識論の自然主義化
は規範的な要素を投げ捨てて進行中の「探究の」手順の無差別な記述に甘んずることを意味しない。」²⁹⁾ 規範的な認識
論は工学の一分野として真理追求、より正確にいうと予知の工学であり、一定の目的に到達するための方法を探究す
る学問である、とクワインは言う。クワインの自然主義化された認識論はまさに科学的方法論的側面に関心をもちそ
の解明を自らの主要な目標とする故、規範的認識論を含まざるをえないのである。クワインの自然主義化された認識
論は、それが自然主義化されたとはいえ、いやより正確にはまさに自然主義化された故に、科学的探究の成果である
理論のみではなく、それを産み出す実際の歴史的な過程をしてその過程のなかでの探究者の探究活動の在り方に、焦
点をあてざるをえないことになる。従って、クワインの自然主義化された認識論のなかで規範的な語彙や目的や意図
にかかわる志向的な語彙が、一定の重要な働きをなすことは明らかである。実際、クワインは次に引用するような箇
所に見られるように、明白な形で規範について語っている。「我々の世界についての思索は規範と警告に (norms and
caveats) 服従しつづける。しかし、これら規範と警告は、我々が科学[的知識]を獲得してゆくにつれて、科学[的知
識]自身のうちから生じてくるのである。・・・規範は科学が進歩するにつれて変化しうる。」³⁰⁾ しかしクワインに
よると、不確定性のテーゼは志向に関する科学の基礎の無さを含意している。³¹⁾ とするならば、クワインは不確定性の
テーゼを保持しようとするかぎり、物理主義的な語彙によつては捉えきれない側面を世界の内に、この場合勿論人間

の科学的探究の営みをも含んだ世界の内に、認めざるをえないはずである。即ち、クワインが自らの自然主義化された認識論の認識論たる所以に忠実であろうとするならば、不確定性のテーゼから志向的言語や志向に関する科学の空虚さを結論するのではなく、志向的言語や志向に関する科学によって初めて明確な理解が可能となるような世界の側面を認め、志向的言語や意味論的言語に尊敬さるべき位置を与えざるをえない筈である。³²⁾先に述べた反論が退けられたとしても、少なくとも、クワインの不確定性のテーゼ及びその含意と彼の自然主義化された認識論の目標のあいだには解決さるべき緊張が残るのである。

最後にまとめとして、これらの問題についての筆者の立場の全体的な見取り図を素描すれば次のようになる。「規範に従った行動が有効性を發揮しうる場合、そこで起きたことは、規範に従う行動というあるパターンに合致する物理的な変化によってある物理的変化が生じた、ということのみである。従って、そのような行動もまた物理的変化を捉える記述・説明の枠組みの内で十分に取り扱うことが可能である」というような形で物理主義に固執する立場が可能である。そのような立場をとるとき、規範や志向に関する語彙が物理的な語彙に本性上 (*in principle*) には還元可能という形での強い立場を採るか或いは規範や志向に関する事実と物理的事実のあいだにトークン・アイデンティティのみが成立していると主張するに留める弱い立場を採るか、の選択が存在する。前者の主張を擁護する議論として、もしトークン・アイデンティティを認めるならばタイプ・アイデンティティを認めざるをえない筈だ、という議論がある。それは次のようなものである。トークンはタイプから全く独立に存在しているのではない。理論から全く独立した生のデータが存在しないのと類比的に、タイプから全く独立した生のトークンなどは存在しない。そして、二つのトークンの同一性を主張する時には、それぞれのトークンが属している二つのタイプのあいだの同一性が示されねばならない。そうしなければ、二つのトークンの同一性の主張は何らの説得力を持ちえない。実際、或る物理的トークンの存在から規範や志向や意味に関するタイプの存在を論証するためには、そのトークンがその当のタイプと結び

つけられる為の条件が理解されていなければならない。そのことは、そのトークンがそのような条件の下にあるトークンであるというタイプ付けがなされていることを意味する。従ってトークン・アイデンティティのあるところにはタイプ・アイデンティティがあると言いうる。そのように考えると、上に述べたような規範や志向に関する語彙が物理的な語彙によって還元されることも全く不可能ではないようにおもえる。⁽³³⁾ここで強調されるべきであるのは、クワインの不確定性のテーゼはア・プリオリな推論、超越論的推論によって導かれたものではないことである。パトナムが「規約主義論駁」で報告しているように、⁽³⁴⁾クワイン自身が不確定性のテーゼが経験的なテーゼであることを示す発言をなしているのである。とするならば、パースの「探究の道を閉ざすな」という格言にしたがって還元の可能性を試みるほうが、少なくとも物理理論と規範や志向に関する理論の活発な相互作用を促進するという点においても、探究のプログラムとしてはより生産的であるように思われる。また、そのように考えると規範や志向に関わる現象も最終的には物理理論の記述・説明の対象となり、それらについての科学と物理理論を区別する根拠がなくなる。のみならず、実践的な可能性を考えるとそのような還元によって規範や志向や意味についての語彙が物理的語彙によって代替される蓋然性はきわめて低い故に、所謂人文科学はその事実上の自立性を保持しながらも、最終的には物理学に帰着する自然科学との生産的な相互作用を出来うるかぎり進めつつ探究を続けることになる。筆者はこの立場に惹かれるものである。無論、その立場の展開そしてその全体的な擁護のためにはより厳密な議論の展開が必要であり、この二十年ほどの間の心身問題・還元主義・物理主義をめぐる議論が考慮されなければならない。それは次の課題として。但し、上に述べたように、たとえ還元主義・タイプ・アイデンティティが否定されたとしても、トークン・アイデンティティが認められるかぎりクワインの不確定性のテーゼは退けられねばならない。

(了)

註

- (一) Quine, W. V. *Word and Object*, Cambridge, Mass.: The M. I. T. Press, 1960, p. 27.
- (二) *Ibid.*, p. 51-52.
- (三) *Ibid.*, p. 78.
- (四) *Ibid.*,
- (五) *Ibid.*, p. 73.
- (六) *Ibid.*, p. 68-72.
- (七) Quine, W. V., "Reply to Chomsky" in *Words and Objections, Essays on the Work of W. V. Quine*, eds., D. Davidson and J. Hintikka, Dordrecht-Holland: D. Reidel Publishing Company, 1969, p. 302-311.
- (八) *Ibid.*, p. 309.
- (九) *Ibid.*,
- (十) *Ibid.*,
- (十一) *Ibid.*,
- (十二) Quine, W. V., "Fact of the Matter" in *Essays on the Philosophy of W. V. Quine*, eds. R. S. Shahan and C. Swyer Norman: University of Oklahoma Press, 1979. p. 155-69.
- (十三) *Ibid.*, p. 167.
- (十四) Quine, W. V., "Things and Their Place in Theories" in his *Theories and Things*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1981. p. 23.
- (十五) Quine, W. V., *Word and Object*, Cambridge, Mass.: The M. I. T. Press, 1960, p. 275.
- (十六) Quine, W. V., "Fact of the Matter" in *Essays on the Philosophy of W. V. Quine*, eds. R. S. Shahan and C. Swyer, Norman: University of Oklahoma Press, 1979. p. 162.
- (十七) *Ibid.*, p. 166.
- (十八) *Ibid.*, p. 163.
- (十九) Quine, W. V., "Mind and Verbal Dispositions" in *Mind and Language* ed. S. G. Guttenplan, Oxford: Clarendon

- Press, 1975. p. 87.
- (20) Quine, W. V., "Philosophical Progress in Language Theory", *Metaphilosophy* 1, 1970. p. 4.
- (21) Quine, W. V., "Ontological Relativity" in his *Ontological Relativity and Other Essays*, New York: Columbia University Press, 1969. p. 26.
- (22) *Ibid.*, p. 29.
- (23) Quine, W. V., *Word and Object*, Cambridge, Mass.: The M. I. T. Press, 1960, p. 74.
- (24) *Ibid.*
- (25) *Ibid.*, p. 20.
- (26) ヲシヤクハナ批評家野坂弘正氏の『Michael Friedman, "Physicalism and the Indeterminacy of Translation"』
Nous 9, 1975. p.353-374 なる論文。筆者のコメントは、ペンローズの議論で多くを負っている。又、ペンローズは
異なる形式ではあるが、同様にタウソンの行動主義が言語現象に関する物理的説明の潜在的能力の過少評価を導いたと言っ
て、野坂氏と同じように Charles Landesman "Scepticism About Meaning: Quine's Thesis of Translation" *Australasian*
Journal of Philosophy 48, 1970. p. 320-337. なる論文。
- (27) Quine, W. V., "Sellars on Behaviorism, Language and Meaning" *Pacific Philosophical Quarterly* 61, 1980, p. 29.
- (28) Fiedman, M., "Physicalism and the Indeterminacy of Translation," *Nous* 9, 1975, p. 370.
- (29) Quine, W. V., "Reply to Morton White" in *The Philosophy of W. V. Quine*, eds. L. Hahn and P. A. Schilpp, La
Salle, Illinois: Open Court, 1985. p. 664-665.
- (30) Quine, W. V., "Responses" in his *Theories and Things*, Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1981. p. 181.
- (31) Quine, W. V., "On the Very Idea of a Third Dogma" in his *Theories and Things*, Cambridge, Mass: Harvard
University Press, 1981. p. 39. ※参照 ショウソンの自然主義化された認識論に対する規範的言語の使用を指摘したものの次の
11の文章を。Rorty, R., *Philosophy and the Mirror of Nature*, Princeton, NJ: Princeton University Press, 1979, p.
223-224. 及び McGinn, C., "W. V. Quine : *Theories and Things*", *The Journal of Philosophy* 80, 1983, p. 241-242.
- (32) Quine, W. V., *Word and Object*, Cambridge, Mass.: The M. I. T. Press, 1960, p. 221.
- (33) 共通性に関するタウソンの説は、坂野謙之助氏の『Daniel Dennett "Mid-term Examination: Compare

- and Contrast" in his *The Intentional Stance*, Cambridge, Mass. : 1987. p. 339-350. が簡潔で便利である。
- (33) チェルミンゲン・ケーター の諸著作以外に、Drew Leder "Troubles With Token Identity" *Philosophical Studies* 47, 1985. p. 79-94. 及び Robert C. Richardson "Functionalism and Reductionism," *Philosophy of Science* 46, 1979. p. 535-558. 等が還元主義・タイプ・アイデンティティ・トークン・マインティヤについての有益な議論を提供している。
- (34) Putnam, H., "The Refutation of Conventionalism" in his *Philosophical Papers*, vol. 2. London: Cambridge University Press, 1975. p. 177-178.

(筆者 はまの・けんぞう 京都大学文学部〔哲学〕助手)

Quine's Behavioristic Physicalism and His Thesis of the Indeterminacy of Translation

by Kenzo Hamano
Assistant
Department of Philosophy
Faculty of Letters
Kyoto University

The present paper aims at explaining the content of Quine's thesis of the indeterminacy of translation and criticizing what I call Quine's behavioristic physicalism which I claim is the pillar of Quine's thesis. First of all, I explain that Quine's thesis is not just an epistemological but rather ontological thesis. As Quine's reply to Chomsky's criticism shows, Quine's thesis ultimately claims the absence of the fact of the matter for theory of translation and for theory of meaning. In other words, according to the thesis, there is no definite structure of reality which provides the final sentence on the truthvalue of competing theories of translation and of meaning. Theories of translation and of meaning are not concerned with reality, and hence do not deserve the title of scientific inquiry, although they may be perfectly respectable practical inquiries. So, Quine claims. Secondly, I explain the content of Quine's physicalism which constitutes his idea of the reality. Thirdly, I make clear the important role played by Quine's behaviorism in his thesis of the indeterminacy. Quine's behaviorism or, more exactly, his behavioristic understanding of language, consists of the idea that because all of us learn language via behavior under publicly observable circumstances, that which we say about language meaningfully must be said in or "cashed in" behavioristic terms. Quine's behavioristic

concept of language, which is manifested in the first sentence in his preface to "Word And Object", provides the final reason for his refusal of the factuality to theories of translation and of meaning.

On the basis of such an understanding of the theoretical underpinning of Quine's thesis, I argue that Quine makes too much out of his behavioristic understanding of language with the result that his behaviorism becomes not quite consistent with his physicalism, or at least that Quine does not provide sufficient reason for the claim that from his correct idea of the important role played in our language acquisition by behavior in publicly observable circumstances we must necessarily accept his arguably far-fetched conclusion. I suggest the direction which Quine could take in which Quine's physicalism could accommodate his behavioristic insight without being distorted by it. Finally, I briefly mention the presence of the tension between Quine's thesis of the indeterminacy of translation and physicalism and his recognition of the legitimacy of normative epistemology, in other words between Quine's physicalism, behavioristic or not, and his idea of the epistemological enterprise as a whole.